にはまだ時間がある。どうした事かと手燭をつけて出て見ると、その辺では見かけたことのないお侍さんが立っていた。

『お頼み申す　拙者は武者修業の武士であるが道に迷って難渋いたしおる　失礼だけんじょ今夜一晩泊めてくなんしょ』と言ったそうだ。

庄屋様は

『いつもならお安い御用だげんじょ、今夜はちょとばっかり取り込んでいやすでない』と断ろうとしたが侍は聞き入れない。

『さいぜんより村の様子を見て歩いたが、村中火の消えたように淋しい。これには深い訳があんべい。拙者も旅の者とは言え武士の端くれ。ずいぶん力になってやんべい。弱い者を助け強い者をこらしめんのが武士の意地だ』

『そんじゃまア　上ってくなんしょ』

ということで座敷に通して一部始終を物語って娘を中にして夫婦は泣いた。お侍は、